言　語　小　論

③

大　森　　孝

◎ 言語と思考について

前号に於て，この事項につき簡単に述べた次第ですが，更に，追加的に述べて見たいと思う。

先づ，ジョン，デューイの考え方を述べて見ると，彼は，その考え方を3つの類型に分類している。即ち，(1)は思惟と言語とは，同一であると云う見解。(2)は言語は，思惟のために必要でなく，思惟を伝達するために丈け必要であると云う見解。(3)は言語は，思惟でわないけれども，言語は，思惟のために必要であると同時に，その伝達のためにも必要であると云う見解，大体以上の見解を，示している。結局デューイは，言語の「実際的社会的用途」と，思考の上に働く「知性的用途」と云うものを区別したのである。

人間は，生れつき言語を習得する可能性とか，傾向を，もっていると考えられる。ところで生れた場所の言語，例えば，日本語なり英語なり特定の言語を，習得すると考えられる。生れつきその言語を使っている人の「直観」を重視している最近の学者に，アメリカの，ノアム，チョムスキーがある。彼の考え方によると，生れつきその言葉を用いている人は，幼児でも，鋭い言語感覚をもって居り，ある表現が，その言語の文法に合っているか，いないかと云う直覚的な判断をもっている。その直覚に基づいて，その言語の文法に合った表現を，ほとんど無限に作り出す事が出来る

と云うのである。そこで文法研究も，単に今迄の様に，表層構造丈けでなく，深層構造を研究する必要があると，述べている。

戦後日本に於ても，西尾氏により「言語生活主義」が提唱されたが，この主張は，言語を生活の中で，生活そのものとして考察して行こうとするものである。したがって，一面，言語活動主義であり，聞く，話す，読む，書く，の四つの言語活動を，活発にやらせようとした。これは，国語，外国語両面にわたっていた。しかし最近は，国民生活が落ちつくにつれて，教育の面で，思考力の養成，表現力，創造力の伸長等が強調されてきている。

◎言語と本質について

先づ，英国のウイリアム，マッケーの論を述べてみると，「哲学の面では，言語を普遍的な思想の外部表現と見る人と，言語用法の相違が，哲学に於けるあらゆる相違を形づくると云う人が居る。心理学の面では，言語を，多くの機能をもった一つの象徴の型と見る人，又，人間の作り出したコミュニケーションの道具であると見る人がある。又，言語学の面では，言語は形式であって，実質ではない。人為的音声象徴の体系であると云う人，又反面に，言語は，実質的なものであると云う人がいる。」

以上の様に，マッケーは，哲学者，心理学者，言語学者の言語の本質観について述べている。上の本質観の中，「意味」に中心を置く者の中に，ドイツのエルンスト，カッシーラ（Ernst Cassirer，1874—1945）が居る。彼によれば，神話，言語，芸術，歴史，科学等あらゆる文化的所産は，人間の象徴活動の結果であり，それぞれに，有意味的な象徴に翻訳されて，はじめて存在する。こうして，人間とは「象徴的動物」であると云う結論に，到達するのである。彼は，言語と云う枠内でその本質を論じて

いるが，視野は「人間」と云う基盤に立っている。以下彼の原文の一部より，彼の思考について考えて見たい。先づ言語と神話との関係について，次の様に述べている。

Language and myth are near of kin. In the early stages of human culture their relation is so close and their cooperation so obvious that it is almost impossible to separate the one from the other. They are two different shoots from one and the same root. Whenever we find man, we find him in possession of the faculty of speech and under the influence of the myth making function.

英文を要約すると，「言語と神話は同族に近い。人間文化の発達の初期の段階では，それ等の関係は，非常に密接で，協力的であるので，両者を分離する事は，殆んど不可能である。それ等は一つの，同じルートから出た二つの違った芽である。人間は，話す能力を有し，又神話を作る能力も有している事を知る。」

尚続いて次の様に述べている。

Both are based on a very general and very early experience of mankind, an experience of a social rather than of a physical nature.

即ち「二つとも，人間の一般的な初期の経験，即ち，個々の性質の経験よりむしろ，人との交際による経験に基づいている。」

尚，彼は語のソーシャル，パワーについて次の様に述べている。

To the mind the social power of the word, experienced in innumerable cases, becomes a natural and even supernatural force.

即ち「原始的心に対して，語の社交的力は，多くの場合に経験される様

に，自然な，超自然な力とさえなる。」

しかし，人が語のこうした不思議な力に，疑をもち始め，このマヂック，パワーが，セマレチック，ファンクション（意味の作用）により置きかえられ，更に所謂，ロゴス迄高められて行く過程を，彼は欧の様に述べている。

When man first began to realize that this confidence was vain that nature was inexorable not because it was reluctant to fulfil his demands but because it did not understand his language-the discovery must have come to him as a shock. At this point he had to face a new problem which marked a turning point and a crisis in his intellectual and moral life. All hope of subduing nature by the magic word had been frustrated. But as a result man began to see the relation between language and reality in a different light. The magic function of the word was eclipsed and replaced by its semantic function.

要約すると，「人がこのマヂックワードに対する信頼は，無駄であると云う事，即ち，自然は人の要求を実行するのを，しぶっているためでわなくて，人の語を理解しないために，無情であると云う事を悟り始めた時，そうした発見は，人にショックであったにちがいない。此の点人は，知的，道徳的生活に於て，曲り角や，危機を示した新しい問題に直面しなければならなかった。マヂック，ワード（神秘な言語）による自然を征服する凡ての希望は，くぢかれていた。結果として，人は，言語と実体との間の関係を，違った光の中に見はじめていた。言語のマヂック，パワーは，その意味的な機能によって失なわれ，そして置きかえられた。」

更に，次の様に続けている。

The word is no longer endowed with mysterious powers; it no longer has an immediate physical or supernatural influence. It cannot change the nature of things and it cannot compel the will of gods or demons.

即ち，「語は，もはや不思議な力を与えられない。即ち，語は，もはや直接の物理的，又は超自然的な力をもたない。其れは，物の性質を変える事も出来ないし，神や悪魔の意志を強要する事も出来ない。」

更に続けて次の様に述べている。

Nevertheless it is neither meaningless nor powerless. It is not simply a mere breath of air. Yet the decisive feature is not its physical but its logical Character. Physically the word may be declared to be impotent, but logically it is elevated to a higher, indeed to the highest rank. The Logos becomes the principle of the universe and the first principle of human knowledge.

即ち「それにもかかわらず，語は無意味でもなければ無力でもない，其れは，単なる声の風でわない，しかし決定的特徴は，其の外形的性格でわなく，論理的性格である。外面上は，語は無気力であると云えるかも知れないが，論理的には，より高い，実際には，最も高い点迄引き上げられる。即ち，ロゴスが宇宙の原理となり，人知の最初の原理となる。」

以上彼の論を考えて見るに，言語の初期の段階を，マヂック，パワーで表わし，これは次第にセマンチック，パワーに置きかえられ，最後に語の最高のランクとして，ロゴスと云う語を用いているのである。

◎ 言語と現実について

アメリカ，イリノイ大学の心理言語学者，チャールズ，オスグーヅ

(Charles Osgood, 1916～) の説を中心に考えて見たい。次に原文を記すと,

Words are conservative, Although they do adapt to the changes in the real world, they do so very slowly if left to themselves. Most of us humans, assuming a lawful and immutable relation between words and things, keep trying to force things to conform to the meanings that their names have acquired in the past.

即ち「言語は保守的であり，現実世界の変化に応ずるけれども，放っておかれると，非常にゆっくりと応ずる。大部分の我々人間は，言葉と物との間に，合法的な一定不変の関係があるものと思いこんで，物を，その名前が過去にもつ意味に，一致させようと努力している。」しかし，この考えに更に続けて，次の様に述べている。

Now, in periods of history when the rate of cultural change was slow, words could almost keep up with things, and their mismatch was barely perceptible.

But in the present age, with its exploding technology, which of course means increasing human interaction and accelerated cultural change, our semantic maps of the real world become outmoded more and more quickly.

即ち，「文化の変化の割合が，ゆっくりであった時代に於ては，言語は，物事について行く事が殆んど出来た。そして，言葉と物との不一致は，殆んど分らない位であった。しかし，現在では，爆発的に多くなった専門語で，勿論それ等の語は，増加する人間の相互作用や，加速度的な文化の変化を意味するのであるが，我々の現実世界の意味上の地図（言語）は，加

速度的に時代遅れになって来ている。」

つまり彼によると，現代世界をリードしているのは，50代以上の人々であり，彼等の言葉により，考え方は，少なくとも30年前に大体定まっている。こうした人々にリードされながら，現代社会は，現実の事柄より以上に，漠然とした言葉に接つしながら進んでいるのであり，そこに当然言葉と物との間のギャップが生じて来ると云うのである。次に，この両者のギャップが，如何なる場合に増すかと考えて見ると，事物が，個人の直接の経験から遠い程増す事になる。例えば，人が家族の親密さや，平常の生活方式から，離れて移動する様な時，その現地に於て，その現地の事物を表現する言葉は，事物に対しギャップは大きくなる。即ち，移動した人の言葉の意味は，他の人々の言葉の意味に依頼する程度が大きくなるのである。例えば，我々が，旅行した場合，現地の事物についての知識の程度は，通常現地の人々に及ばない。したがって，その物の用語等に対する知識も及ばない。即ち，言葉と事物とのギャップは大きくなる。

前に述べた様に，言語は保守的であると言える。しかし又，力も持っている。では，力は，如何なるところにあるのであろうか。この事に関して，オスグーツは，次の様に述べている。

Obviously the power of the word does not lie in the noises and squiggles themselves. It lies rather in a very remarkable relation between these physical manifestations called signs and certain processes in language users called meanings. This is the representing relation.

即ち，「明らかに，言語の力は，耳ざわりな音や，のたくった文字の中にわない。其れは，むしろ符号と呼ばれる物理的な表示と，言語の使用者の中にて，意味と呼ばれる或る過程の間の非常に目立った関係の中にあ

る。これが表示される関係である。」少し説明的に述べて見ると，即ち，言語は，それ等の使用者の中にて，関係して居る事実についての特別の表示を，示す様になる。そして，此等の表示は，物自身よりも容易に，象徴的に，巧くあつかわれるものである。この様にして人は，ここにないものや，今ないものについて，適切に取り扱う事が出来る。したがって，自分より遠くにある事実についての言葉も，我々に，希望を与えたり，恐怖を与えたりする事が出来るのである。例えば，アメリカのカーター大統領の世界の石油政策に対する提言とか，ソビエットの，日本周辺に於ける軍備打張等についての発言等も，その一例である。

次に，人間の言語が，相互に理解されない理由として，オスグーヅは，次の様に述べている。

What particular noises and squiggles will be used to represent What particular things and events is largely arbitarary. This is one reason why human languages are mutually unintelligible.

即ち，「どんな特別の耳ざわりな音や，のたくった文字も，特別の事物が大部分独断的である事を表示するのに用いられるであろう。これが，言語が，相互に理解されない一つの理由である。」

少し説明的に述べると，人が，或る一つの耳ざわりな音を使っている様な処に生れると，その音に対して，知らない中に，他の人が使っている様な方法で，その音を用いる様になる。と云う事である。こうした事は，方言等の場合，よくある事である。

次に，人間の言語が，互いに訳する事が出来る場合を考えて見ると，先づ，オスグーヅは，次の様に述べている。

Once these many different rules of usage have been agreed upon, even though unconsciously. The relation of meanings to th-

ings is not arbitrary-which is one reason why human languages are mutually translatable.

即ち，「無意識であろうと，一度　言語使用の多くの種々のルールが同意されたなら，事物に対する意味の関係は，独断的ではなくなる。この事が，人間の言語が，互いに訳する事が出来る一つの理由である。」

尚，彼は，語の意味について次の様に述べている。

The meaning of a word can be conceived as a simultaneous bundle of distinctive semantic features.

即ち，「語の意味は，独特の意味上の特徴の，同時の束として考えられる。」

尚，言語に於ける表示的象徴的過程は，事物のどんな特性が，経験に於て重要であるかを示す為に，一種の規約を用いるのである。しかし，言語が規約される意味上の特徴は，表示される凡ての事物の特性を含む事が出来ない故に，語はどうしても抽象的になる事は避けがたいのである。語の力は，事実から選び出された抽象の中にあると云える。そして，意味的に規約されている事物の特性は，考えると云う事に，焦点を合わされる。反面，規約されていない事物の特性は，非常に，ぼやけている。そこで，どの事実面が，言語によって焦点を合わされたり，ぼかされたりするかは，どの事物の特性が，過去の言語の使用面で，重要であったかと云う事によると考える。こうした事例は，我々が外交面の条約等に関する用語で，しばしば経験するところである。又，国際政治に於ては，用語は，一種の呪文的な性格を，帯びて来ると考えられる。例えば，"the right to self-determination（自決の権利）" "a threat fo freedom（自由えの脅威）" 等である。

次に，言葉の「あいまいさ」（the ambiguity of words）について述

べてみると，世界の言語学者の中には，一語一義主義を唱える人達も居るが，反面，語の「あいまいさ」は，人と人との結びつきを，スムーズにすると云う利もある。国際政治に於ては，言葉の「あいまいさ」については，以前程重大でなくなって来ている，と思われる。これは，国際政治は，ウイットの試行より，力の試行として，考えられているからであり，言葉の「あいまいさ」と云うのは，相手に「いどむ」と云う感じより，一種の「おどし」となっていると思われるからである。

又，国際的な事柄に於ける意味上の変革は，故意に国々の間の差別をなくしたり，又，国々の間の類似性や，国々の中の差違を，強く示す様な言語を用いる事によって，国名の「あいまいさ」も増して居る様である。

◎ 言語と生存について

先づ，次の様な場合を考えて見たい。即ち，人が車が来るのに気づかず，左右をよく見ないで道路を横断し，車に，はねられそうになる，その折，誰かが「危ない，気をつけろ」と叫ぶ，その声により，我に返った其の人は，事を避け，危うく難をのがれる事が出来る。言い換えれば，人は，他人の声と云う手段によるコミュニケーションによって，難をのがれた事になる。この様な協力的行為により，高等動物は，生存していると云える。こうした事について，アメリカの言語学者，ハヤカワ（S. I. Hayakawa. 1906～）は，次の様に述べている。

Although his nervous system did not record the danger, he were unharmed because another nervous system did. He had, for the time being, the advantage of someone else's nervous system in addition to his own.

即ち，「其の人の神経系統は，危険を記しなかったけれども，他の者の

神経系統が記録した為に，彼は，怪我をしなかった。彼は，さし当り，彼自身の神経系統に加えて，他の者の神経系統の利益を受けたのである。」

此の様な場合を考えてみると，人の存在の確率は，他人の神経系統の利益を利用する事が多い程，多くなると云える。

鳥や動物の場合を考えてみても，彼等は同種の物は，よく団結する。そして，食物を見つけたり，驚いたり，警告を発したりする時に，声を立てる。この事に関し，ハヤカワは，次の様に述べている。

Gregariousness as an aid to survial and self-defense is forced upon animals as well as upon men by the necessity of uniting nervous systems even more than by the necessity of uniting physical strength.

即ち「生存と自己防衛の助けとしての集団性は，肉体的力を合わせる必要よりも，神経系統を合わせる必要により人間と同じ様に動物の上に，必要なものとなっている。」

次に，インディアン達が，自分の足跡を示す為，印をつけた木々からはじまって，今日の新聞迄，随分と変革があって今日に及んでいるが，その具体的例として，ハヤカワは次の様に述べている。

Many of the lobstick trails in the Canadian woods, marked by Indian long since dead can be followed to this day. Archimedes is dead, but we still have his reports on what he observed in his experiments in physics.

Keat is dead, but he can still tell us how he felt on first reading Chapman's Homer.

即ち，「カナダの森の中の木に目印をつけた道の多くは，ずうと以前に死んだインディアン達によって，つけられたものであるが，今日迄使う事

が出来る。アルキメデスは死んだが，彼が物理学に於ける実験で観察した事実についてのリポートは，我々は，今も，持っている。キーツは死んだが，チャップマンの叙事詩を最初に読んで，如何に感じたかを，我々に語る事が出来る。」

以上から考えてみると，現代に於ては，新聞や，ラヂオや，テレビ等から我々は，世界の出来事をすばやく知る事が出来るし，又，多くの書籍，雑誌等から，我々の会ったことのない多くの人々が，如何に考えたり，感じたりしていたかを知る事が出来る。

人が自己の知識を拡げる場合，自分丈けの経験にたよっていたのでは困難である。他人の経験を利用する事により，昔から文化は，発達して来たのであり，そのコミュニケーションの手段として，言語が用いられて来た。又将来，他人が経験したり，失敗したりした地点を踏台として，更に飛躍する為にも，その手段として言語が必要である。しかし，我々は，テレビ，ラヂオ，新聞等いわゆるマスコミを通して，あらゆる種類の語の洗礼を受けている。その中には曲解されて報導される語もある。又同じ語でも，違った人々には，それぞれ違った意味に取られる場合もある。人の上に投げかけられる言語は，人を幸福にする事もあり，又，不幸にする事もある。人を心配させる事もあり，又，奮い立たせる事もある。例えば，結婚式に於て，二人の誓い合った言葉は，その二人の一生を結びつける。又，職場に於て出された一枚の辞令の上の言葉は，その者の生活の基盤を形成する。言語と人の生存とは，離れる事の出来ないものである。

◎ 言語と経験について

先づ，アメリカの有名な言語学者エドワード，サピア（Edward Sapir, 1884～1939）は次の様に述べている。

Langnage completely interpenetrates direct experience. For most persons every experience, real or potential, is saturated with verbalism.

This perhaps explains why so many nature lovers do not feel that they are truly in touch with nature until they have mastered the names of a great many flowers and trees, as though the primary world of reality were a verbal one, and as though one could not get close to nature unless one first mastered the terminology that somehow magically expresses it. It is this constant interplay between language and experience which removes language from the cold status of such purely and simply symbolic systems as mathematical symbolism or flag signalling.

即ち，「言語は完全に直接の経験にしみ込んで行く。大部分の人に対して，真実な，又は可能性のある，あらゆる経験は，言語使用と一体化している。此の事は，多分何故に非常に多くの自然愛好者達が，非常に多くの花や木の名前を，よく知ってしまう迄は，自然に接触しているとは感じないと云う事を説明している。それは丁度，真実の主なる世界は，言語の世界であるかの様であり，又，人が自然に対して，不思議な表現力のある用語法を，マスターしなければ，自然に接する事が出来ないかの如くである。言語を数理記号学，又は手旗信号の様に，純粋な単純な記号組識の冷たい地位から，移動させるものは，言語と経験との間の「此の不変の相互作用である。」

以上の説明を考えてみると，結局言語は，人の生活，体験，全体に入り込んでいる故に，人は，一つの物に接触し，観察しようとする時，その物に関しての言語を，充分マスターしなければ，その満足感を得る事が出来

ないと云う事である。ここに言語と，経験との密接な相互作用が展開してゆくと考える。

次に，アメリカ文化人類学者クライド，クラックホーン（Clyde Kluckhohn，1905～1961）は次の様に述べている。

Nothing is more human than the speech of an individual or of a folk. Human speech, unlike the cry of an animal, does not occur as a mere element in a larger response. Only the human animal can communicate abstract ideas and converse about conditions that are contrary to fact. Indeed the purely conventional element in speech is so large that language can be regarded as pure culture.

即ち，「個人又は何人かの会話より以上に，人間的なものわない。人の会話は，動物の叫びと違って，一層大きい応答の中の一つの単なる要素として起るのでわない。

人間のみが，抽象的な考えを伝えたり，事実と反対な状況について話をする事が出来る。実際話し言葉の中には，全く慣用的要素が非常に多いので，言語は，純粋な文化として考える事が出来る。」

以上彼は，人間の会話を，人間と動物とを区別するものであると認め，更に，その会話の中の慣用的要素より，言語は文化とも考えられると述べているが，実際，相手の心理状態を知る上からも，言語は非常な手引きとなると云える。我々の毎日は，言語の中で生活していると云える。自分自身に語りかけたり，他人に話しかけたり，又他人から話しかけられたり，それに応じたりしている。又，新聞，雑誌，書物等を読んだり，又ラヂオ，テレビ，映画，講演等を見たり，聞いたりする。何れも言語の恩恵に浴しているのであり，正に言語文化と云えよう。反面，注意すべき事柄は，国

家間の不和，衝突である。その原因は，やはり，相互の理解不足であり，その根底にあるものは，相互の言語の違いから来る相互の言語文化の理解不足が，もたらすものと云えよう。（1979.8）

bibiliography:

ジョン，デューイ：思考の方法. 1950，春秋社

L. Bloomfield : Language, 1933, New.York

William F. Mackey : Langnage Teaching Analysis, 1965. America

西尾　実：ことばの教育と文字の教育 1966，筑摩書房

C. Fries : Linguistics and Reading, 1962

E. Cassirer : Language, 1976 Kyoto

editedwith

T. Nishihara

C. Osgood : The Words of Power, 1977, Tokyo
(edited with T. Yamada)

S. I. Hayakawa : Language in Thought andAction 1945, New York

E. Sapir : Language 1930 America

C. Kluckhohn : From Mirror for Man, 1949, America

C. Kluckhohn : The Words of Power 1978 Asahi Press, Tokyo
(edited with H. Togawa
S. Ishiguro)

教育学全集⑤1975，小学館，東京